

ミステリ読書案内

2023. 6. 8 発行元

第485号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

シューヴァル&ヴァールー代表作

スウェーデンの作家であるマイ・シューヴァル／パール・ヴァールー夫妻の代表作を取り上げる。もちろん『マルティン・ベック』シリーズの中から三作を選ぶことになる。「警察小説」の王道とも言える作品。

「マルティン・ベック」シリーズ

シューヴァル&ヴァールーによる作品は『マルティン・ベック』シリーズの10作。出版順で言うと『ロゼアンナ』『蒸発した男』『バルコニーの男』『笑う警官』『消えた消防車』『サボイ・ホテルの殺人』『唾棄すべき男』『密室』『警官殺し』『テロリスト』の並びになる。

私の好きな作家なので全作品が手元にある。後期の作品は全部単行本で買った。その中から代表作『密室』『笑う警官』『テロリスト』の三作を選んだ。いずれも角川書店からの出版である。

「警察小説」と言えばマクベインの『87分署シリーズ』が代表として上げられるが、私は『マルティン・ベック』シリーズの方を高く評価している。警察官・刑事一人一人の行動をリアルに描くことはもちろん当然なのだが、社会全体の様相を犯罪者の行動や捜査側の考え方を通して表現している点でレベルの高さがあると思うのだ。

周りを冷静に見つめ、余計な感情を付け加えないで描く手法はハードボイルドと共通しているとも言える。「警察小説」の出発点はそこにあると思うのだが…。多くの人に薦めたいシリーズ。

NO.3「テロリスト」

1975年。シリーズ最終巻。アメリカの上院議員がストックホルムを訪問するのに合わせて国際テロ組織U L A Gが動き出し、ベックたちが警護を担当する話である。

この当時既に現在の資本主義社会の行方を見据えていることが素晴らしい。物質中心主義で金儲けに終始する世の中は、格差や差別を広げる形に進んでいき、権力を持たない多くの人々の精神的な負担を増大させる。その反動として社会の暗部にテロ組織・個人のテロリストが生まれ、暴力に訴える行動が突然発生したりする。

ベックたちは多数の力による警備や武器の使用といった強権を用いずに上院議員を守る方法を考えようとする。そこが本書の読みどころ。

NO.1「密室」

1972年の作。シリーズ第八作。シリーズ中で最も「ミステリ」らしさが盛り込まれた作品。題名そのものが『密室』だし…。前作で胸に銃弾を受けたベックはようやく復帰したところ。

最初の場面はある女が銀行に入り、拳銃を取り出し、出納係に金を持参した袋に入れるよう要求するところ。奪った金を持って逃走に移る瞬間に、立ち向かう男が駆けだしてきたので夢中になって拳銃を発射する。その後現場から離れるという流れ。その後警察による捜査で得た証言の一端。次の場面は、ベックが久しぶりに警察本部に出勤するところ。コルペリをはじめとする特捜班の面々は連続銀行強盗事件に駆り出されて四苦八苦している。今までに5件の事件が続いているようだ。コルペリは復帰祝いのプレゼントだと言って赤いフォルダーをベックに渡す。それは老人の変死事件に関する記録。怪我明けのベックに激務をさせないための配慮だった。ところがその老人の事件は捜査がおざなりで疑問点が多々あるものだった。一見、拳銃自殺に見えるのだが、その部屋は密室であり、肝心の拳銃が部屋の中で見つからない状況なのだ。誰からも注目されない事件をベックは掘り下げていく。実は、それは連続銀行強盗事件と…。緻密な構成の傑作。

No.2「笑う警官」

1968年の作。シリーズ第四作。私は高見浩の訳で読んだのだが、それは英語版を日本語訳したもの。今手元にある2013年の新訳の角川文庫版は柳沢由美子の訳。こちらはスウェーデン語からの日本語訳である。その時その時の社会を描こうとした作者の意図からすると、本書の背景になっているのはベトナム戦争。今の若い人たちにはピンと来ないかもしれないが、私くらいの年代になると強烈な印象を残した歴史的な出来事。本書冒頭にもベトナム戦争反対の反米デモが登場してくる。

マルティン・ベックは同僚で友人のレンナート・コルペリとチェスをした後町を歩く。アパートに帰り着いた時に電話が鳴る。市バスの中で乗客が銃撃され、複数の死者が出たという。現場に急行せよとの指示が。犠牲者の中にベックの部下のオーケ・ステンストルム刑事が含まれていた。非番なはずなのになぜか拳銃を携帯していた。バスに乗るのは通常の行動ではなかった。現場到着時にまだ息のあった犠牲者のひとは意味不明のメッセージを残して亡くなった。捜査陣はどう動けばよいのか。亡くなった人達一人一人について調べを進めていくベックたち。『笑う警官』という意味も考えさせられるストーリー展開である。